

日本工業博物館史 の研究

馬淵浩一 著

“日本の”博物館 再考のために

いま、日本の博物館は隆盛？ 苦境？
これからは？

工業博物館

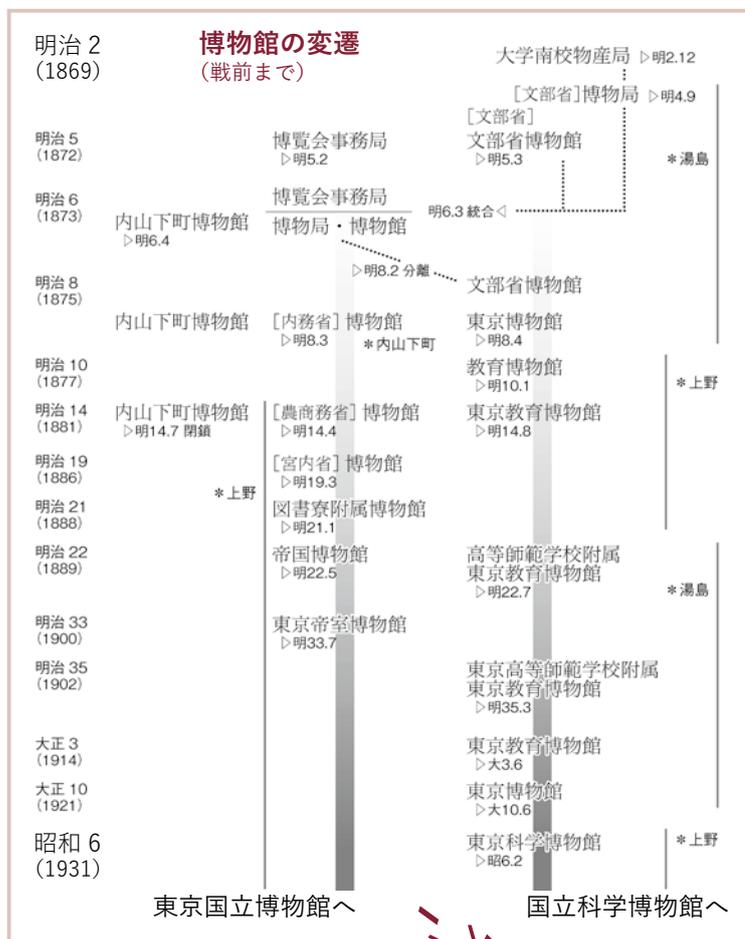
文化財としての工業資料を保存・展示し次世代に継承する

明治以降、幾度となく提案されてきた日本の工業博物館
設立計画、しかしいまだ実現されないのはなぜなのか？



永年、博物館業務に従事してきた著者が、
諸種・厩大な史料文献をもとに歴史を掘り下げその核心に迫る。

科学技術・産業そして行政・教育の広範囲にわたる論究から、
近代日本の文化・思想の課題があぶり出されてくる。



*本書収録の図・写真より



愛知県商品陳列館
長岡高等工業学校附属科学工業博物館
東京科学博物館工業館
オスカー・フォン・ミラーの講演
市立名古屋科学館

資料に命のちを
作品に心こころを
形にして伝える。

学術資料出版
大空社出版

www.ozorasha.co.jp

日本工業博物館史 の研究

馬淵浩一 著

いったん工業的価値が減減しても新たに文化的な価値が生じる。そのような無形の文化的価値を再構成して提示する場が

工業博物館なのである。

(終章 工業博物館の実現に向けて より)

読者へ

本書の

執筆が佳境に入った令和4(2022)年の秋、東京国立博物館で創立150周年記念特別展が開催された。この特別展は同館が所有する89点の国宝すべてを含む名品と諸資料を公開する一大展覧会であり、洗練された感性に支えられ独自の美を放つ美術・工芸部門の作品群、歴史を雄弁に語る発掘品、原書などを目の当たりにして圧倒的な感銘を受けた。翻って未だ工業博物館が設立されていないことに対し改めて残念な思いがこみ上げてきた。工業教育や科学技術振興などを主目的とせず、文化財としての工業資料を保存、展示し、次世代に継承する工業博物館が設立され、歴史・美術の博物館と対等な評価が与えられる日が来ることを切望してやまない。

博物館の

普遍的な目的とは何か。それは貴重な資料を収集し保存して次世代に継承していくことである。工業博物館の場合でいうと、工業資料を文化財として認知し保存継承を図ることである。この視点に立ち、工業博物館を実現するための具体的方策についても本書で言及したいと思う。

著者

(まえがき/あとがきより抜粋構成)



*大空社出版 2023年10月刊

A5判・265頁・並製・カバー

978-4-86688-236-9

定価 3,850円 (本体 3,500円+税)

● 著者 馬淵浩一 まぶち・こういち

現在、名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究センター研究員、名古屋工業大学大学院および放送大学非常勤講師。博士(工学)。

1957年、名古屋市生まれ。1983年、市立名古屋科学館(現名古屋市科学館)勤務、2021年3月、名古屋市科学館(主任学芸員)退職。著作に『日本の近代技術はこうして生まれた：産業遺産をヒントに考える』(玉川大学出版部1999)、『技術革新はどう行われてきたか：新しい価値創造に向けて』(日外アソシエーツ2008)など。共著に『日本の機械工学を創った人々』(前田清志編、オーム社1994)、『日本の技術革新大系』(国立科学博物館2010)など。

総合知としての博物館 工業博物館史からの再認識へ

長崎歴史文化博物館館長
日本ミュージアム・マネージメント学会会長

水嶋英治

本書は、日本における工業博物館の歴史と現状を検討した学術書である。著者馬淵浩一氏は、明治時代から昭和戦後までの工業博物館設立運動や工業教育改革運動を、政治・経済・社会・文化の各方面から分析したが、こうした総合知としての博物館を俯瞰的に見た研究はこれまで存在しなかった。本書の中では、各地域の工業発展や科学技術振興に寄与した博物館や陳列所の事例も豊富に紹介されている。さらに、日本の工業博物館がドイツ博物館などの海外のモデルからどのように影響を受けたのか、なぜ工業博物館がわが国で実現しなかったかについて総合的に考察したのは、碩学馬淵氏だから成せる技というほかない。前代未聞の壮挙と言える。工業博物館が日本で実現しなかった原因として、本書は、工業のそれぞれの発展段階において、実利的な目的が強調されたため、博物館と博覧会を混同（ないし同一視）して、コレクションの形成を怠った、と指摘している。

日本の工業史や科学技術産業史に関心のある読者にとって、本書は貴重な基礎文献となることであろう。工業博物館は、科学文化や技術遺産を保存・展示・教育する場であり、国民の科学技術理解や産業振興にも寄与する役割を果たす機関である。しかし、日本では戦争や経済危機などの社会的要因、理科教育や科学技術振興などの政策的要因も存在した。そうした背景や原因を明らかにし、今後の工業博物館のあり方について示唆を与えるてくれる必読の一冊である。

構成 (目次抄)

序章	西欧における工業博物館の歴史 / 研究の問題意識
第一部	明治政府の博物館政策と地方行政による陳列所の展開 (明治)
第1章	殖産興業と明治の博物館政策 工芸博物館設立計画の阻却 博覧会と博物館の黎明：試行的なコレクション形成 / 上野の博物館：歴史・美術博物館への傾斜
第2章	手工業から工場制工業への転換を促した愛知県商品陳列館と県下の織物業 陳列所と工業博物館 / 山口貴雄の運営方針 / 愛知県の工業
第二部	試験研究機関と高等工業学校に附属した工業博物館 (大正)
第3章	東京市電気研究所附属電気博物館の設立と文部省による博物館政策の変化 科学博物館・理化博物館を求める声の高まり
第4章	長岡高等工業学校附属科学工業博物館による地域の機械工業支援 長岡市の産業構造転換：石油掘削から機械工業へ / 長岡工業相談所による地域産業への技術指導
第三部	ドイツ博物館の紹介と工業博物館設立運動 (昭和・戦前)
第5章	機械工学者らの唱導による工業教育改革運動と東京科学博物館の設立 東京博物館から東京科学博物館へ / 学術団体による工業教育改革案と工業博物館 / ドイツ博物館の情報の入手とその動機
第6章	日本工学会による工業博物館設立計画 機械学会の工業博物館設立運動 / 工業博物館設立計画の挫折
第7章	紀元二千六百年記念日本万国博覧会を契機とした工業博物館設立計画 博覧会開催の要望から中止に至る政治過程 / 陳列館の恒久化による工業博物館設立計画 / 東京科学博物館の拡張計画への転換
第四部	戦後の工業博物館設立運動とその変容 (昭和・戦後)
第8章	清水勤二の唱導による市立名古屋科学館の設立 科学技術振興と工業博物館 文部省科学教育局長、名古屋工業大学設立 / 技術者養成の声の高まり
第9章	1960～1990年代の科学館の変化 工業博物館からの離反 1960年代：理科教育支援と科学技術振興 / 1980～1990年代設立の科学館の類似性
終章	なぜ工業博物館が設立されなかったのか / 工業博物館の実現に向けて
引用・参考文献一覧	索引

●ホームページの本書案内に詳細掲載

* 図表 54点収録

変遷・概要・分類・数量データ
組織・人物略歴・社会背景

日本工業博物館史 の研究

馬淵浩一 著



A5判・265頁・並製・カバー
978-4-86688-236-9

定価 3,850円
(本体 3,500円 + 税 10%)

明治以降、幾度となく提案されてきた
日本の工業博物館設立計画、しかし
いまだ実現されないのはなぜなのか？

永年、博物館業務に従事してきた著者が、
諸種・膨大な史料文献をもとに歴史を掘り下げ
その核心に迫る。

科学技術・産業そして行政・教育の広範囲
にわたる論究から、近代日本の文化・思想
の課題があぶり出されてくる。

* 図表 54点収録

変遷・概要・分類・数量データ
組織・人物略歴・社会背景...

関連分野
キーワード

博物館学 商品陳列館 万国博覧会 科学館 美術館 伝統 保存
コレクション 寄贈・委託品 実物展示 価値 実験室 プラネタリウム
殖産興業 科学技術 工業教育 理科教育 学芸員 社会教育
科学振興 産学協同 産業遺産 企業博物館 国家と地方 日本近代史

博物館基本文献集

全21巻・別巻1

残部
数組

(2023.9)

監修 伊藤寿朗
(大空社 1990-1991 復刻刊行。全2回配本)

近代日本の博物館を造り支えてきた
博物館の理論・思想と実践の歴史を一望

博物館が組織的な取り組みを開始した1920年代
から1950年代までを主な対象に、理論書、啓蒙
書などの単行本、パンフレット、戦前の海外植民
地の館を含む案内書、統計資料など網羅的に復刻

A5/B5判・上製

揃定価 218,900円 (本体 199,000円 + 税 10%)



学術資料出版

大空社出版

www.ozorasha.co.jp

eigyo@ozorasha.co.jp

TEL:03-5963-4451

FAX:03-5963-4461

(〒114-0032) 東京都北区中十条4-3-2

*お取扱い